2022 年 1 月 13 日

アンケートに関連し、日本建築家協会(JIA) 中野地域会の視点のご紹介

アンケートの問 2 で引用した JIA の陳情「**区役所・サンプラザ地区の再整備を独自性・先進性に富むものとすることについて**」の各項に照らし、公表されている事業施行予定者の**提案書**が、議会採択となったそれらの内容を反映しているか、弊会でも公表直後から検討したところです。

ここでは、その中の２項目を例に、計画の実施にあたって解決または改善すべき点を記します。
今後の区議会でのご議論に際し、ご参考にして頂ければ幸いに存じます。

＜青字は陳情からの引用＞

１．中野の文化・アイデンティティを継承発展させる、区民が誇れる意匠・計画となっているか？

1－a　シンボル性、イメージしやすさ

一見しただけで中野と分かる、他所とは類似しない、質の高い建築造形が求められる。 現在の中野サンプラザは全国的な認知度があるが、新たな施設もこれを超えるシンボル性さらには芸術性を備え、中野を全国へ、そして世界へと発信することが望まれる。

残念ながら、他所でも見られるような、類型的な再開発の風貌であることは否めません。
また、“サンプラザの DNA の継承”と称する不可解な斜め線の挿入など、現サンプラザの設計の工夫や意図を理解した上での本質的なシンボリズム継承とは言い難い面があります。大幅な洗練と、独自性の確保とが望まれます。

1－c　中野のまちの記憶を未来へとつなぐ、歴史との連続性

歴史の厚みを感じられない、新しさだけのまちには持続的な魅力は期待できない。人々の記憶を随所に取り込む配慮が必要である。

この事業提案の施設計画の大きな問題点の一つは、現サンプラザがポピュラー音楽界の「メッカ」となり得た背景にある、駅前から北西に向けての祝祭的な天空の解放感が失われることと、現サンプラザのような、イベントの場へと意識を高揚させるアプローチが無く、イベントとは連動しない大量の視覚情報や動線の重層が、そうした高揚を相殺する要素となっていることです。
「記憶を将来につなぐ」という意味では、半世紀にわたり中野の駅前に実現していた高揚感を、いかにして新しい形で引き継ぐかが、現時点での喫緊の課題でしょう。

２．近隣街区との連動性や、生活空間としての親近感を実現しているか？

現サンプラザが中野通りに対し屏風状の壁になったことの反省の上に、イベント時の混雑を緩衝する空間の確保のみならず、大小の個店舗の配置などを通じ、回遊性の強化や飽きの来ない体験提供、また中野通りの両岸のバランスの確保が必要である。

現時点での施設計画の最大の問題点のもう一つは、シンボルタワーが現北口と西側の新北口とを分断することです。
現計画の「出会いの広場」は現在の中野通りを跨ぐブリッジの高さにあり、現北口との東西接続は現在すでに存在する階段とエスカレーターに、全て依存することになります。
中野通りを地面に沿って見れば、JR のガードから現在のサンプラザの東面楽屋口あたりまで切れ目なく高さの分断が続きます。 このような大きな落差の連続は、回遊性にとっての顕著な阻害要因です。
現計画での、四季のまち方向への誘導は、交通広場へのトンネルと新ホールへの大階段のみですので、今後の建築的な工夫で少しでも分断を和らげる必要があります。

以上

公益社団法人 日本建築家協会 中野地域会　　代表 白江龍三